

商業高校の足跡

——同志社と勤労青少年教育——

同志社は、創立百周年を迎え、次の百年に向かってその第一歩を踏み出そうとしている。このときあたり、商業高校は、その二十八年の歴史を閉じようとしている。ここにその足跡を振り返り、その意義をあらためて問いなおすことは、同志社の次の一歩のためにけつして無意味なものとはいえないだろう。

同志社商業高校は、昭和二十三（一九四八）年四月に設立された。勤労青少年のために、同志社教育の機会を与えることを目的とする夜間定時制、男女共学の学校である。初代校長は、商学部の岡本春三教授が兼務された。最初の新入生は一四六名と記録されている。校舎は、今出川校地の、現在には取りこわされた聚芳館（新大学図書館北側）が本拠であった。当時は、戦後の混乱期であり、かつ新学制発足のときでもあったから、今では想像もつかない状況であった。

土山登

あろうと察せられる。停電も多かったようで、「停電のため授業中止」という記録が日誌に残っている。食糧事情も悪かった頃で、ラ物資の脱脂ミルクをすすりながら勉学に励んだようだ。

昭和三十六（一九六一）年、現在の新町校地に移転した。

商業高校は、同志社の諸学校のなかでも、比較的規模の小さい学校であった。生徒数は、だいたい五〇〇名前後で、もっとも生徒数の多いときでも六九〇名程度であった。専任教職員も多いときで十七名を数えるにすぎない。このような小規模の学校であるうえに、夜間定時制ということもあって、学内でもその存在に気づかなかつた人も多いかと思う。しかし、内容的には、きわめてユニークな存在であったと言える。

生徒たちの約八十パーセント以上が有職者で、その職種は干差万

別であった。販売店員、工員、一般事務はもとより、看護婦、警察官、公務員など多様であった。変わり種では、一度カソリックの修道尼が四、五人入学したことがある。さすがにこのときには、教諭会でも問題になったが、とにかく入学を許可した。プロテスタントの学校にカソリックの修道尼が独特の衣しょうに身をかためて通学するという奇妙な光景がみられた。彼女たちは卒業後、ある社会福祉施設で、現在も活躍している。

年齢構成も、近年は平均化されたが、それまでは、マチマチであった。四十歳をこえる人もあったし、三十歳前後はザラにいた。こういう年長者は、おしなべてきわめてまじめであった。修学旅行の付き添いをしていても、こういった生徒の方が教員よりもはるかに服装もバリッとしており、かっぶくもよかったので、旅館の番頭もかれらを教員と間違え、カバンをもって部屋に案内し、こちらが置いてきぼりをくったりした。若い教員には、かならずこういう経験の一つや二つはあった。

商業高校に入学するのは比較的容易であったが、卒業するのはなかなかむづかしかった。入学した生徒のうち、卒業できるものは、約2分の1といったきびしい数字をみてもあきらかである。家庭の事情でやむをえず退学したものもあったが、いかげんな気持ちで入学したものは、すぐ落後し、退学した。実際、入学とともに、かれらの環境は激変した。昼は職場での複雑な人間関係の渦中に立たされ、精神的に相当な負担となったであろうし、その上、夜通学するには、かなり強い精神力を必要としたことであろう。また、四年の課程を五年も六年もかけて卒業した例や、途中で退学し、数年

後再入学し、卒業した例もかなりあった。

また、毎年卒業生の約三十パーセントが、大学の一部および二部に推薦入学で進学した。定時制というとか暗いイメージが浮かぶが、日々の重圧にもかかわらず、本校には明るい表情、明るいふんいきがあった。それは、自分たちも努力すれば、高等教育を受けられるという心の支えがあったことにもよる。一貫教育の良い面をそこにもみることができ。

これらの生徒にとって、学校は昼間の苦勞を仲間と語り合い、励まし合い、心を休める場所でもあった。クラブ活動にも熱心であった。商業高校には、かつて陸上、バレーボール、バスケットボールをはじめとする、各種の運動部および文芸、珠算、新聞その他の文化部があり、多数の生徒が参加していた。練習は、毎日授業終了後、午後九時から十時までのわずかな時間であったが、かれらにとって、もつとも充実したひとときであった。熱中のあまり、しばしば十時までという学校の制限を超過し、いったい睡眠時間はどれくらいとれるのかと心配したものである。しかし、生徒募集停止後は、生徒数の減少にともない、伝統あるクラブが、つぎつぎに姿を消していった。クラブ活動をやりたくてもやれなくなった生徒の表情は暗く悲痛であった。最後の五十年代には、かろうじて、バレーボール、卓球および珠算部がほそそその活動を続けたにすぎない。クラブ活動は、高等学校、とりわけ定時制高校では重要な意義をもっており、クラブ活動の沈滞は、てきめんに学校全体の空気の沈滞にも通じた。

ここで、生徒募集停止決定に至るまでの経過について述べることに

にする。

商業高校は、財政的に種々の困難があったので、過去にも非公式に廃校ということが出たことはあった。生徒の方でも、当然その空気に敏感に反応し、昭和四十二年には、生徒会でこの問題をとりあげている。昭和四十四年では、当時の学園紛争に本校も巻き込まれ、商高共闘委によって、臨光館が封鎖されてしまったことがある。この封鎖は、八月から十月に及び、その間学外で分散授業をするという異常事態となり、商高の内外に大きなショックを与えた。このときの商高共闘委の要求項目のなかに、廃校阻止がかかげられていた。しかし、法人サイドで廃校問題が具体的にクローズアップしたのは、昭和四十六（一九七一）年度からである。まず商高特別委員会がこの問題の口火を切った。商高特別委員会は、理事長の諮問機関であつて、商高の、主として財政に関連する事項を審議するものであつた。構成員は、総長、理事長をはじめ、商高校長および元校長、その他大学関係者より成り、その時々に応じて、たびたび代わつてゐる。この商高特別委員会が、住谷委員長の名で、昭和四十六年八月、概要次のような報告書を提出した。

すなわち、「全日制高等学校への進学率がたかまつた結果、定時制高校への進学者は漸減の傾向」にあり、「現在の定時制高校は一つの曲がり角に來ている。」とし、収支不足が相当な額に上るなかで、「もし商高を存続させるのであれば、不足金をなんらかのかたちで、補填する見透しを立てることが必要となり、これを放置して存続をさせることは無責任のそしりを免れない。」更に「単に経済的な理由だけで廃止の方向を………軽々に踏み切るべきではないが」、「十

分な教育的な効果の問題、その社会的必要性の問題等をも考えて何等かの結論を下すべき時に來ているのではないか。」と述べ、商高委員会ですべて以上討議すべきではなく、理事会が関係機関の意見を十分にきいて結論を下すべきであると結んでいる。当然理事会でも検討されたようで、商高の教職員は、もちろん廃校反対の意思を表明した。けっきょく、いろいろ曲折をへた後、教職員三名の社内他校への転出による人件費削減を条件に、四十七年度の生徒募集がかうじて認められた。かくて、平林校長および教員二名が、それぞれの思いをこめて商高から去つていった。そのあと後任校長の人選が難航した。当初大学より兼任校長を迎える予定であつたが決定せずとなりあえず住谷総長が暫定的に校長代行となり、四十七年度が始まつた。このように実質的には校長不在という異常な状態で新学期をスタートしたが、廃校問題に火がついてゐるので、さっそく生徒会から質問状も出され、五月には、教職員も「申し入れ書」を住谷総長、秦理事長に提出し、存続の希望を訴えた。また同月、商高廃校実行阻止共闘会議の名で、アジビラがくばられ、一人の生徒は、臨光館でハンガーストライクに入つた。卒業生有志や生徒会からも、署名とともに存続の要請書が提出された。父兄会や講師の先生がたも訴えられた。七月には、教職員組合の連合ニュースでも大きくとりあげられ、その月の理事会が注目された。七月十九日、総長、理事長と商高教職員との懇談会がもたれ、席上理事長は、「七月の理事会で、生徒募集停止を決定したい。」と発言した。かねがね理事長は商高は細く長くという考えで存続を計つたが、ここに至り万策つきたと述べた。かくて、二十二日の理事会では、「商業高校は廃校する

方向で具体案を策定し、関係方面との調整をはかる。」と決定され、廃校に向かつての実質的な第一歩がふみ出された。同時に、住谷総長が、暫定的な校長代行ではなく、正式の校長代行となった。しかし、この理事会決定には、法人評議員会の議決も必要であった。一縷の望みをつないで、教職員が手わけをして、評議員に対して存続の要請をおこなった。

二期期がはじまり、九月五日には、総長、理事長が、父兄会、卒業生および生徒会の役員と会い、続いて七日に、全生徒を集め、商業高等学校の現況とその対策について「が配布され、それについての説明がおこなわれた。その文書には、定時制高校への志願者が減少し、定時制高校に対する社会の需要が大きく低下したこと、および赤字が増大し、理事会の経営能力を超えた財政負担となるとの判断から、理事会は、廃校する方向でその具体策をたてるほかはない」との結論に達したと述べられていた。更に二十一日に生徒会との話し合いを女子大会議室でおこなったが、はじめるとすぐ、大学の赤ヘルメットの学生が乱入し、総長が、いすごと新町校地まで拉致される事件が起こった。このような混乱のなかで、二十二日に法人評議員会が開かれ、商高の生徒募集停止は継続審議となった。しかし、十月理事会では、四十八年度の生徒募集停止が、はっきりと決定された。十一月一日、生徒会と再び話し合いが持たれたが、終わった時に、秦理事長が、「土山君、ばくは同じことを繰り返して説明するより仕方がないんだよ。」と沈痛な表情でつぶやかれたのが印象に残っている。しかし、法人評議員会の決定はなされていなかった。反動運動は続いた。十四日には、理事長が全学園の学生に

よって明徳館前の団交にひき出され、商高廃校問題について追求をうけた。そして二十五日、秦理事長は急逝された。このあわただしい状況のなか、十一月二十七日、法人評議員会で生徒募集停止が決定され、公式的にもピリオドがうたれた。この決定は、すぐ教職員に文書で伝えられ、生徒たちにも文書が送付された。

これまでの商高廃校反対運動を振り返ってみると、一部に生徒のハンガーストもあったが、全般に静かな反対運動であったように思う。私の主観では、そこには四十四年当時の学園紛争の後遺症が残っていたと考える。あのとき、独立校舎獲得のため、夏休みを繰り上げての臨時休校、教職員の座り込み、封鎖、学外での分散授業といった苦い経験があった。当時、多くの生徒が蒙った迷惑を考えると、この廃校反対運動で、思い切った行動に出ることはためらわれただけではないか。

ここで廃校の原因の一つとなった財政問題に触れたい。同志社は昭和二十九（一九五〇）年に、総合会計から独立採算会計に移行している。当然その時点で、商高のような勤労青少年を対象とした財政的基盤の弱い学校については、特別の配慮がなされるべきであった。しかし、基本的には他の学校と同じように、授業料収入のなかでの収支均衡が求められた。以後商高の歴史で、収支が均衡し赤字がでなかったのは、わずか三年であった。学内の他校から援助をうけたこともあったが、すぐ諸学校の経営悪化から打ち切られた。人件費は年々膨張し、一方授業料の値上げは学校の性質上困難であった。授業料は、創立当時から年間六千五百円であったが、四十一年以降は三万円となっている。これは、他の全日制私学の値上げ幅に

比べると極端に低い。しかし、勤労青少年を対象とする限り、安易な授業料値上げは自殺行為につながる。分担金の免除もおこなわれたが、焼け石に水であった。この財政難を打開するため、私学に対する国公費助成、普通科・工業専門学校への移行、タイプ講座の開設、通信教育の採用など、各種の方策を検討」（商業高等学校の現況とその対策について）され短期大学の設置なども検討されたが、実を結ぶに至らなかった。

生徒数の減少については、中学卒業生の減少、加えて全日制高校進学率の上昇により、昭和四十五年前後から、その傾向が著しかった。商高側でも西陣織物組合と折衝したり、その他対策を講じたがこれまた残念ながら、目だつた効果はなかった。

同志社では、過去にもいろんな学校が消え去っていった。しかしそのなかには、いわゆる発展的に解消したものもあり、商業高校のように、その跡をつぐものがなく、その存在がまったくなくなる例はあまりない。商高と同じような例としては、看病婦学校や同志社病院のようなものがあるが、今日これらのものが存続していたら、その意義はきわめて大きいものがあつたにちがいない。その当時の事情としては、それぞれやむをえなかつたかも知れないが、同志社にとっては不幸なことであつたと思う。商業高校に対する評価は、最終的にはもっと先でないと判断できないが、少なくとも次の点は強調できる。

同志社は、いうまでもなくキリスト教を基本として、設立当初より社会的弱者に対する味方としてその存在意義を誇つていたと考えられる。同志社は、「二人や三人の英雄」（同志社大学設立旨意書、大政治

家や権力者の輩出を誇る学校ではない。先輩諸氏の足跡をみても、キリスト教界、教育界、社会事業界等に誇るべき人物を生んで、偉大な足跡を残している。商高の生徒は、まさに弱者であつた。経済的にも、その多くは、社会の底辺にあつた。職場でも、中学卒の新入社員として弱者であつた。就職に際しても、最近はいよいよ改善されたが、金融機関や大企業からは、その門戸を閉ざされ、差別され、苦しんでいた。精神的にも、肉体的にも、経済的にもまさに弱者であつた。

このような生徒たちに同志社教育の機会を与え、同時にこれらの味方となつてやつた商高は、同志社の精神からみても、実践そのものであつた。

これらの大部分は、卒業後も社会にうずもれ、はなばなしく名をあげたりすることもないだろうし、それを期待するのはまったくはずれである。一庶民として活動するなかで「一国の良心」（前掲書）たる、同志社精神が生かされるならば、それこそ商高本来の目的にかなうものである。

私は、商高が、単に財政上の赤字から安易に切り捨てられたとは考えたくない。全日制高校全入のなかで、定時制高校への進学者が減少しているのは事実である。また、京都の私学のなかで、定時制高校をかかえ、最後まで苦闘したのも同志社であつた。もっと早期に「賢明にも」見切りをつけ、さっさと定時制高校を切り捨てた例もあるなかで、同志社はともかくも最後までがんばつたのは事実である。しかし、これら勤労青少年の弱者が現在なくなつたわけではない。もっと条件の悪い通信制高校生も依然としてかなり存在し、日

夜苦闘を続けている。私は、今後の同志社が、これらの弱者に対しなんらかの手をさしのべうる場を求めていくべきであると思う。そうした姿勢がまったくなく、いたずらに生徒数の大なるを誇り、建物の偉容を誇り、エリート教育のみを追い求めることになるならば、次の同志社の百年は創立者の理想から遠くかけ離れたものとなるだろう。

最後にこの機会に、商業高校存続中、好意あるご支援をくださったかたがたに、感謝の言葉を申しあげたい。商高は常に財政的に苦しく、十分な設備や施策を講ずることができず、各方面のご好意に甘えざるをえなかった。専任教員の不足から、講師の先生がたにも過重の負担をしていただいた。大学関係、厚生館、アーモスト大学、その他ご厚意をよせてくださったかたにお礼を申しあげたい。

商業高校は、昭和五十一年三月七日、最後の卒業生二十五名を送り出し、三月末日をもって廃校の予定である。卒業生総数は、二、一〇二名である。

累積赤字の見積もりは、三億二千六百万円である。

(商業高校校長)



同志社商業高等学校歴代校長

昭和	23.	4.	1	～	27.	3.	31	岡	本	春	三	兼	任
	27.	4.	1	～	27.	9.	30	西	田	賀	次	専	任
	27.	10.	1	～	28.	1.	24	大	塚	節	治	校	長
	28.	1.	25	～	31.	3.	31	沖	中	忠	一	校	任
	31.	4.	1	～	33.	3.	31	中	村	三	郎	兼	任
	33.	4.	1	～	34.	3.	31	齋	藤	亥	三	専	任
	34.	4.	1	～	35.	1.	31	松	岡	英	士	校	任
	35.	2.	1	～	37.	3.	31	和	田	洋	一	長	任
	37.	4.	1	～	41.	3.	31	志	賀	英	雄	兼	任
	41.	4.	1	～	44.	3.	31	藤	代	泰	三	兼	任
	44.	4.	1	～	47.	3.	31	平	林	悦	一	専	任
	47.	4.	1	～	50.	11.	10	住	谷	悦	治	校	任
	50.	11.	11	～	51.	3.	31	土	山	登	登	長	代
												専	任

小さな学校

——商業高校のあれこれ——



横 田 守

《消える同志社商高、勤労青少年励まし二
八年間……》こんな見出しで、五〇年一月
五日付京都新聞夕刊は、商高の幕切れを報じ
ている。豪華な写真集「同志社一〇〇年」
に、写真一枚載らなかった「小さな学校」で
はあったが、学校は消えても、せめて「わた
したちが苦勞して学んだ心の故郷だけは残そ
う」と、いま、卒業生の手で記念碑をつくる
計画がすすめられている。記念碑は、聚芳館
跡の植込みの中に建つという。

つとめいそしめ花のうえの／きらめく

露の消えぬまに
とき過ぎやすく暮れちかし／あさ日て
るまにいそしめよ

春、四月×日、午後六時、夕日が西空に傾
くころ、商高では、この讚美歌で新入生を迎
えてきた。遠く九州、四国から、紡績工場や
西陣の織物工場へ勤めに来た生徒が多かつ
た。入学式には勤務先の主人や、先輩が付き
添ってこられた。この新入生たちのうち、四
年後の卒業式で、共に別れの歌をうたえるの
は、入学時の生徒の、およそ五割にも満たな

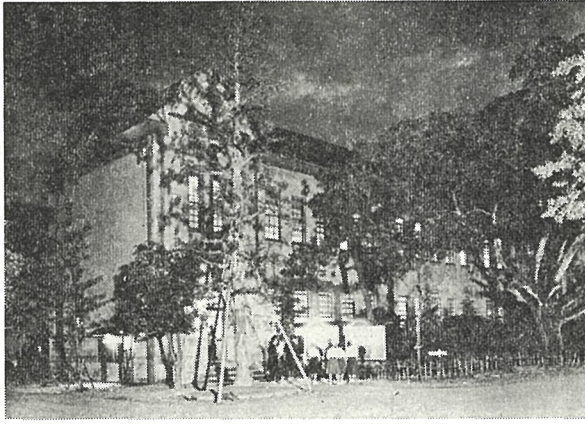
い。教師も生徒たちも、途中で去っていった
仲間のことを思った。同窓会には、何人かの
中退者が、必ず顔を見せるといふ。

夏、昭和四四年の夏は、長く辛かった。五
月頃から学園紛争が激化し、新町校舎では乱
闘事件が続いた。「安心して授業が受けられ
る場所を」と、新島会館の前で座り込みをし
たり、校舎探しに走りまわった。八月二五日
の封鎖から二カ月間の休校、御池と高原町に
分散した藤川学園での変則的な授業、異常な
状況の中で、退学していく生徒も出た。

多くの方々に迷惑のかけどうしであった。
心も身体も疲れ果て、「もう学校の教師な
んぞになるもんか」と思った。あれから七年、
紛争の後遺症は、まだ心のすみで時々痛む。

秋、臨光館の階段を登ると、東山の紅葉が
西日をうけて実にすばらしい。真赤な夕日が
西の山にかかろうとする頃、生徒たちは登校
する。ほとんどの生徒は夕食をとっていな
い。昼間の高校生が家路につく頃、彼らは、
一日の仕事を終えて追われるように校門をく
ぐる。入学した当初は、やはり夜学へ通つこ

とに抵抗を感じたと、ほとんどの生徒はいう。午後五時五〇分から九時五〇分まで……授業が始まると居眠りをはじめる者、休み時間だけ生き生きとして、仲間同志で話し合う



聚芳館の夜景
(昭和三五年当時)

者、学校は彼らにとって憩いの場であったともいえる。クラブ活動は午後一〇時までと定められていた。しかし、一〇時に校門を出る者は少なかつた。家へ帰って食事をし、風呂に入ると、床につくのは一体何時になつていたのであろうか、朝の勤めは早いという。

こんな生活が四年間、冬はさすがに辛かつたという。それでも四年間、皆勤した生徒が毎年何人かあつた。成績はどうであれ、「おれは四年間やり抜いたんや」という自信が、彼らに生きぬく根性をうえつけた。

……………

冬、いつの頃からか、早天祈禱会のあと、若王子を降りて全員が、百万辺の「進々堂」へ集まり、参加者には、コーヒーとホットドッグをご馳走するようになった。藤代先生が校長の頃であつた。ざつと八〇人近い生徒が集まつた。先生方の財布が悲鳴をあげたことを覚えてゐる。翌年からは、ホットドッグがトーストパンにかわり、生徒たちはがっかりしたとか……。

商高には、もう再びこのような春秋は訪れない。せめて、お互いに心の絆だけは大切にしていこうと思ふ。

……………
商高で学んだすべての人にとって、「商高は憩いと、喜びと、希望をあたえる場であつた」とはいえないが、商高で生涯の友を得、神との出会いを心から感謝している人は多い。商高で蒔かれた小さな種は、やがて成長し、実を結ぶであろうと、ただひたすら祈つてやまない。

昭和二三年から二八年間、このような商高を育て、守つてこられた、現在の教職員、旧教職員の方々、卒業生、父兄の方々、僅かな講師給で、夜道を急ぎ奉仕してくださつた嘱託講師の先生方、保健婦さん、商高のために何かと温かい手を差し伸べてくださった、大学をはじめ、法人本部、女子大、中高の方々に心からお礼を申しあげるとともに、母校を失う二千余人の卒業生一人一人のうえに、平安を祈りたい。

(本部職員・元商業高校教諭)

(五一・一二七)

* * *

同志社を去るに当たって

児玉実用

短かかった、とは決していえない。同志社生活だったから、せめて最終講義の時には、大きな教室に学生がまばらで、さむぎむぎと教壇を去って行かねばならないようなことにはなつてほしくない、というのが、最後が近づいた頃のひそかな願いだったことは偽れない。というわけで「英文学概論」の Final Lecture には、幾らか怖る怖る大きな教室へ行った。見ると意外にも出席者数はいつもより多く、まず内心ホッとしたこと偽れない。

いよいよ講義が終わって今学年度終講の挨拶をし、「と同時にこれがぼくの同志社における最後の講義です」といった途端、

(近年の英文学科ではそんなことが失われつつあったのに)突如として二度にわたる大きな拍手が湧き上がり、これには少なからず感激した。その感激のまま教室を出ようとすると、これはまたどうしたことだろう、ある学生から、ぼくには過分なくらい豪華な花束を贈られた。ここでまた大きな感動をした。それが次第に鎮まって、いい知れない感謝に浸っていったのは帰宅後暫らくしてからのことであった。思ひのほか、こんな好印象に恵まれて同志社生活に終止符を打たせて貰えた感謝と幸福とを、ぼくは生涯忘れることはないであろう。

同志社での教壇生活四十二年。それ以前

の大学生、大学院生時代を加算すると半世紀を越える。母校の歴史の半ばである。だから同志社はよくにとつて、古い言いぐさだが、心のふるさと以外の何ものでもない。その間、日本にも、世界にも、だから同志社にも、いろいろのことがあり過ぎるほどであった。それら一つ一つからぼくはどんなに多くを学んだか知れない。だがその遠景、中景、近景について今ここに述べていとまに窮する。

去るにのぞんで、思いつくこと、それは、一、教職員の相互関係が、今も結構だが、ますます円滑円満になるよう、決して事務的機械的にならないよう、努めてほしいこと。これが学校を温かい教育の場にする根本条件だと思う。

二、学生と教師の比率をもっとよくなるようにしてほしい。何といつても教育は人間の触れ合いだから。また、そこからそ私学の良さが出てくるから。

三、学生を一層大切にしてほしい。決して甘やかすのでなく、同志社人として仕上げのためである。そこにこそまた私学の良さがあると思う。

四、同志社教職員はその職を単なる「職」としてでなく、常に「*Job*」としてまもり抜いてほしいこと。一旦緩急の際は、これがすべてを決する。

五、運営その他は時代に即して移り変るにしても、その根幹においては、一挙手一投足に至るまで常に良心から出発する心がけを一層大切にしてほしいこと、などである。

短かからぬ同志社生活から受けたもうも

私学の独自性と同志社

駒井 四郎

ずいぶん以前に読んだことなので、多少記憶が薄れているが、教育社会学を専攻した永井文部大臣は、「日本の近代化と教育」なる書物をおつて発表した。その中で彼は私立大学の中であって、慶応、早稲田、同志

社の大きな恩恵に対して、いまだ何ら報いることなく、その意味では、今去るに忍びないものがある。しかしそれは、これから一卒業生として、旧教員として、及ばずながら、母校のため、できるだけのことをさせて戴きたいと念じている。

皆さん、ありがとうございます。

(大学文学部教授・英米詩研究)

社を、独自性を持った自由主義型の私学として高く評価し、それらの私学の創立者である福澤諭吉、大隈重信、新島襄の人物について言及している。そしてこれらの私学は、官学の垂流でなくして、むしろ官学に

対するアンチテーゼとして生まれたものとして、日本の近代化に果たした意義について述べている。

御承知のように、徳富蘇峰も「三代人物史」のなかで、福澤、大隈、新島のひととなり、慶応、早稲田、同志社の設立の事情について述べているが、福澤は経済人、大隈は政治家でもあったが、新島は一すじに教育者として同志社の設立と、その教育に全生涯をかけた独自の存在であったといえる。

戦後、高等教育の分野にあって、私立大学は、教育の民主化と社会的要請によって発展した。もちろんこの高等教育機関への進学率の増大という現象は、日本のみでなく欧米においても同様であったが、わが国においては私立大学がその大半を担ったということに、日本の特色があるといえよう。文部大臣の諮問機関である高等教育懇談会の高等教育計画部分の中間報告によると、昭和五十年度の高等教育機関(大学・短大への入学者は六十万八千人であるが、そのうち八十二・五％は私立であり、国公立は十七・五％にすぎない)としている。そしてこ

の進率は、同年令層の三十八・三%であつて、アメリカに次いで高いのである。

数年前に、わが国の教育事情調査のために来日した、エドガーフォール氏を団長とする「経済協力開発機構」の教育調査団は、わが国のいびつな、量的に発展した高等教育の欠陥を指摘して、その質的充実と格差是正の必要性を勧告している。

同志社大学においても、戦後の量的拡大から質的充実へ転換すべき時期を迎えている。しからは同志社大学の質的充実とは何であろうか。それは第一に、同志社大学の独自性を改めて鮮明にすることであり、第

同志社を去るに当たって

私が同志社に入社したのは昭和三十三年

四月であつた。今にして思えば、誠に平和、

岡本昌夫

二には、同志社大学が、現代の大学理念に堪え得る教育研究の充実を計ることである。時あたかも百周年を迎えた同志社が、新島襄の教育理想の原点に回帰し、本学の独自性ともいふべき、キリスト教主義に基づく人格主義、国際主義、自由主義教育を二十一世紀に向けて発展させることである。物質文明と精神文明のアンバランスから生じた現代文明の危機が叫ばれている現代において、われわれ同志社人は、新島襄の教育理想の今日的意義を改めて認識する必要があるのではないか。

(大学総務部長)

平静な時期であつた。それから文学部に九年、女子大に九年在職したが、その間同志社もずい分変わった。建物が大きく建て変わっただけではなく、学生や教職員の数もすっかり一変した。新町校舎はその時分にはなく、もちろん田辺もなかった。昭和三十三年の英文科の学生の総数は、せいせい五〇〇名足らずであつたし、女子大の英文科もほぼ同数であつた。今では一学年がそれ位の学生を擁している。

学生が多くなつたということは、学生と教師との関係をすっかり変えてしまった。十数年前の学生と教師との交わりはすっかり今とちがつていたといつてよい。しかもここ数年は人情が一変した様に思う。私が同志社へ来て深く感じたことは、教師が学生に親切であるということであつた。教師は学生に深い愛情を傾けるが、これは国立や公立の学校ではとても見られぬことである。殊に学生の卒業論文の指導などは懇切丁寧で実に行き届いているのに驚ろいた。教師間の親密さも特筆しなければならぬ。これは同志社出身の方が多いせいもあるが、自分の様に他大学出身者も同じよう

に親切に接して下さった事は感謝の至りである。他大学に見るような党派的な争いもなく、争う時は正々堂々と争うことは立派であるといわねばならない。

今後の同志社に対して何を要求するかと問われるならば、私は同志社を昭和三十三年ころに戻してほしいと言おう。学生は一学科二〇〇名を越えてはならない。これによって学生を精選して、真の同志社を建設すべきである。教師も精選して優れた人材を集めることが望ましい。

次にカリキュラムを更め、縮少して同志社に合ったカリキュラムを作ることが望ま

しい。何もかも八百屋の様に店を張る必要はない。必要不可欠なもので、同志社らしいカリキュラムを作らなくてはならない。

そうすれば自ら適當の大きさの同志社が生まれてくると考える。この狭い校地に合った学生を収容すればよい。多くとも今の半分の学生で充分ではないか。それ以上を収容しようと思うならば田辺へ発展するより外はない。田辺の土地を遊ばせておくことは、同志社にとっても、国家にとっても大きな損失である。田辺へ早く発展することを願う者である。

(女子大学教授・英語、英文学)

同志社を去るに当たって

大橋 寛政

私は昭和四年三月に同志社中学を卒業し

た後、アルバイトをしながら立命館大学で

法律を勉強したのですが、戦後感じるものがあって同志社大学神学部に学び、二十五年の三月に卒業いたしました。そして三十二年四月から招かれて同志社香里中高校の社会科並びに聖書科の担任教師となり、途中、二年間、選ばれて校長をつとめたこともありましたが、本年三月をもって定年退職ということになりました。在職二十年というのは学校教師としてはそう長い期間ではありません。否、むしろ準備期間といってもよいくらいで本当の仕事はこれからだという気がします。とにかく同志社とは因縁浅からぬ者ですから去るに当たって多少の感慨なきを得ませぬ。それで日頃、疑問に思っていることの二、三を書いておきたいと思えます。

同志社はかくれもないキリスト教主義学校であります。校祖新島襄はもとよりその目的で創立したのであり、学校法人同志社の「寄附行為」にも又そのことを明記しています。だが具体的にはどういう方法手段でその方針を実現しようとしているのか、それがどうもはっきりしていないように思えます。キリスト教主義教育というのは、

特別な目的をもつ教育なので、その実施方法も特別な方法が考えられなければならないので、単に、国、公立学校の規則や設備を真似しているようでは、その特色を發揮することはできないでしょう。

キリスト教主義教育というのは、キリスト教精神に基づく教育ということに外ならないと思うのですが、それなら、神を敬い（敬神）、隣人を愛する（愛隣）ことが基本精神でしょう。だから敬神を具体化した形での「礼拝」と、隣人愛の具体化としての「奉仕の精神」とが強力に実行されねばなりません。このことは、幼稚園から大学まで一貫した教育方針であるべきで、この基本線がいい加減にされているような教育は、もはやキリスト教教育とは言えず、従って同志社教育ではないと思います。

教育とは、おしえる（押し強いる）こと、そだてる（巢立てる）ことで、子供を一人前にするための親のきびしい愛情のあらわれであり、子供のもつ可能性を引き出すとともに、それを正しく発展させることにあると思います。その正しきの基準をキリスト教道徳におくことが新島襄の教育精神だ

と思うのですが、そういう意味の教育が今の同志社に行われているのかどうか、はなはだ疑問に思います。

キリスト教の精神は、「生活上必要なものは必ず与えられる」（マタイ六―三三）、また「受けるよりも与える方が幸いである」（使徒行伝二〇―三五）、という人生観に通じるのでありますから、同志社の教職員は、この捨身の精神に徹するのなければ、真の同志社教育は出来ないと 생각합니다。従って、教職員の任用には、当局は最も留意す

同志社よりいただいたもの

戦後、国民全体が仰ぎ見るものを失い、努力してきたもの一切、たたきのめされ、空漠たる虚無感に打ちひしがれていたその

の必要があり、またクリスチャン教師の採用に積極的の方途を講ずるべきでありましよう。

また生活保障や待遇改善の要求のために授業放棄のストライキも辞めないという労働組合の主張は全くキリスト教精神に反するものであります。だからキリスト教教育の立場からは、労働組合の存在は同志社の宗教教育を著しく妨害していると思いがどうでしょうか。

（香里中高教諭・聖書）

西山由起

（ユキ子）

心の空洞の中に、一条の光が照り映えているように思われたのは、同志社が生きてそこにあったことでした。あたかもそれを象

徴しているかのごとく、日本の主要全都市が焼き払われ、焼土と化した中に焼け残された京都の地に、しかも縁に包まれた御所を南に持ち、内外の人の真心で建てられた美しい栄光館を中心として同志社が建てられてあったことは、その奥に何か厳肅なものを感じました。

当時、たまたま長女を同志社へと、上落いたしました節、女子部の北門へ通じる道路で眼の澄みきった人と出会い、思わず立ち止まりましたが、その方は気付かずに通り過ぎてしまわれました。あとで同志社女子中・高校長、末光信三先生とわかり、奥深い平和に満ちたまなざし、静かな御風貌から滲み出る何か尊いものにひかれて、私までも同志社に入らせていただきました。長女も私も同志社に入れていただきたこととはどんなに幸いと思えたことでしょう。

早速洗礼を受け、キリスト教とは、民主主義・民主主義教育とは、図書館教育とは……まず掴みとらねばと、教会、聖書研究会、夜間の同大講座、夏期講座、その他種々の催物、講演会とあつかましくも出しゃばり、神を、同志社をわかりたい、同志社

人になりたいと努めました。

長い歴史を通じて、又、個々の歴史(同志社等)を通じての神の摂理の一端を、又、大自然の不思議等を通じての宇宙の究極的な実在としての神までは、意識を通じて理解出来ました。しかし、神が絶えず我々の人格に働きたまう実存的な神として、神いまし給うとの信念になり得ませんでした。

たまたま同志社百年を迎えるに当たり、書物に、出版物に、礼拝に、記念事業、記念会等各方面にわたって、同志社創立の原点に立ち返る多くの努力がなされました。そうした趣旨により集められた本の中に、久永省一先生のお父上が同志社中学生として、たまたま、森文部大臣をチャペルに迎えた時、出席しておられ、その時の新島先生に対する第一印象を記されたのに出会いました。「……文相は前へ進み出て、豪然とそりかえり、一場の訓示を始めた。文部大臣の顔と比べて、新島先生の顔は何と謙虚な、静かな顔であったろう。その目の静けさ、それは山奥に濃い緑を湛えた川の淵にも似ていた」。私は、前に述べました末光先生の第一印象を通して、新島先生のその静

けさを実感として胸にきざみこませてくださいました。

こうした平和な御風貌から滲み出てくるもの、人の心に感動を与え、人の心まで変える力をもつものを、見えない光^{ミチ}的であり、エネルギー^{エネルギ}・的であり、こよなく清く尊いものとして受け止めました。そしてそれは必然的に聖書のみコトバとながっていききました。

ロマ書八章「神の霊が諸君のうちに宿るかぎり思念は肉になく霊にある。肉の思念は死で霊の思念は生と平和なのである。」新島先生のうちに神の霊が宿っていられたのだ、との確信は、今まで軽く考えていた最初の聖書の部分、マタイ伝三章一節、ヨハネによる水の洗礼に続いて、「私のあとからきたるものは、聖霊と火によってバプテスマを施さん」、神の御霊の鳩の如く降りて……」聖書と火のバプテスマ、これが中心課題となってきました。

かつて、先生が学生堀真一氏に諭された言、「人は目的に向かって出発せんとするや……略……踵いて足の爪がはがれても、

ロイド宣教師のこと

高橋 虔

終戦後の同志社教育のために二十五年の長きにわたって献身し、今はニューヨーク市の近くのストーニー・ポイントで病氣療養中のロイド宣教師を思つてこの一文を書くことにした。(本誌十二号、二十八号に夫妻の写真がある)筆者は、昭和二十六年四月に先生が同志社神学部教師として就任された当時から知り合ひとなり、友人、また同僚として、また、同じ聖書神学を専攻する者として、共に種々の苦楽を分かち合つたことは、いつまでも残る思い出である。

ロイド先生は、一九一四年(大正三年)、英國ウェールズ生れであるから、筆者とは十年も若いからであるが、どことなく英國紳士としての気品があり、落ち着いた長者の風があつ

た。しかし、自分は農家の生れだから、花や野菜を造るのが好きだ、と言つておられ、服装などはいつとも質素なものを身につけておられた。大正の昔神学寮のあつた、あの西寮の敷地にある自宅から、いつも自転車で学校その他に出かけられたのを、よく見かけたことである。先生はウェールズ大学を卒業後、スコットランドのエディンバラ大学に入り、そこで、「ヘブル書におけるモーセ律法の取扱ひについて」の論文により、D.D.の称号を受けられた。この論文の一部は、その後「基督教研究」にも数回にわたつて掲載されている。大祭司としてのキリストは、モーセ律法の根幹をなすレビ系祭司制を廃絶させるほどの優れた力量を持つ、「メルキゼデクに等し

い」永遠の祭司であるということを強調したものであるが、旧約の祭司制はそれ自体としてキリスト教の準備となり、祭司制そのものは両者に共通であることを説かれたようである。伝統はどこまでもこれを守るが、新時代には新しい形を打ち出して行くという穩健な神学的態度は、その後のロイド先生の生活にも貫かれていた。その間ウェールズの長老教会で按手礼を受け、その後間もなく、一九四四年(昭和十九年)に軍隊付牧師となり、イタリア、オーストリア、インド、マレイ及び日本に転勤し、一九四九年(昭和二十四年)に除隊となつた。この軍隊付牧師になつた理由について尋ねたことはないが、当時は戦争中でもあり、また先生はその頃から外国伝道を

志しておられたためとも考えられる。

日本に滞在中、英国のような島国の日本に共鳴する所が多くなり、たまたま同志社からの招へいがあったので、日本における宣教師となることを決意し、米国の長老教会外国伝道局員となり、エール大学で六カ月の日本語訓練を受け、翌昭和二十五年八月に日本に到着、その翌年に同志社の教員となられたのである。時に冗談半分に「自分が日本にこられたのはヒットラーのおかげだ」と苦笑された



Mr. & Mrs. Lloyd

こともあったが、そのためかヒットラーに関する本も読んでおられ、筆者に Alan Bullock の Hitler: A Study in Tyranny (1952; Revised Edition, Penguin Books, 1962) を貸して下さったこともある。この書物は諸資料を駆使して書かれた歴史家の著である。

昭和二十六年の四月からロイド先生の同志社二十五年の生活が始まったのであるが、その間神学部においては「ヘブル人への手紙」はもちろん、新約の正典と本文、ヨハネ福音書、新約時代史、パウロの手紙など広範囲にわたって教授の任に当られた。常によく準備しておられたので、学生の多くの者に満足感を与えたようである。しかし時には、「教室では適当な日本語が出てこないので困る」とこぼしておられた。その他にも京都大学の要請によって、新約のギリシャ語、旧約のヘブル語も教えておられ、京大の学生中にも先生の学恩を受けた

者も相当の数に上っている。昭和三十三年八月に、神戸女学院に教えておられた、同じく宣教師のジーン夫人と結婚されたからは、よく学生を自宅に招いて彼らをもてなし、大学紛争の時なども、邦人教師が応待しかねている急進的な学生を、特に自宅に呼んで食を共にされたこともしばしばであった。また、七年ごとの休暇の年には英米の大学で研究を続けられ、その余暇には各地の教会を訪問して、同志社教育のことを語り、奨学金などを集めて帰校されることが常であった。先生は糖尿の持病を持っておられたので、特に食物には注意を払い、いつもサッカリン様の甘味を持ち歩いておられた。共に八瀬のかま風呂に入ったことなども忘れられぬ思い出である。

New English Bible の新約が完成した時 (1961)、先生はそれについて英文で一文をもしておられるが (The New English Bible 基督教研究、一九六三年、それを読むと、この新訳の出たことを大いに喜んでおられることがわかる。特に、ルカ十五・二〇、ヨハネ一・一七・十一、ロマ九・十一、第二コリント二章の新訳はよくできていると賞賛されている。昭和四十七年三月の基督教研究誌に

は、それもまた英文で「トマスによる福音書」についての研究を発表しておられるが (A Comparison of Some of the Parables of Jesus common to the Gospel of Thomas and the Synoptic Gospels from the Standpoint of the Allegorization of the Parables) それによれば、トマスによる福音書の中には、特にイエスの譬え話の中には、正典の福音書よりもっと古い段階の伝承が見られることを強調し、たとえばマタイ二十二・一一―十四、ルカ十四・十六―二十四とトマスによる福音書の譬え話(六十四)とを比較すると、後者の方がもっと直接、簡明であり、マタイ、ルカ(特にマタイ)の方はキリスト論的に寓意化され、初代キリスト教会の神学が強く表面に出ているというのである。これは相当大胆な説であるが、今後の研究によって、その真相が解明されて行くことと思われる。

ロイド先生は「ヘブル人への手紙」の神学は、この世の生活に入り込む神学 (theology of involvement) であると言われたが、彼自身その神学の実践者であった。病いえて再び同志社を訪ねて下さる日待つ者である。

(大学神学部名誉教授)

(二十六頁より)

血が出ても足許を見るな。キリストを仰ぎ見て前進せよ。」これはそのまま、先生の、日本を出国して以来、命を賭しての御生涯のあり方であり、特に最後の、死ぬことがわかっているの御上京、それは全く肉の思念を捨て去って、霊の思念に従われたのであって、肉に死に、霊に生きる、その死から生への転換の中に、新たな自己を通しての神の実存を、言い換えれば、御霊のふりそぐのを体現されたのではないだろうか。『同志社百年』No. 4、大木金次郎「先生の手記の中に」神霊の焰は人の心を熱するに必要……最も必要な神霊の焰を、求むることを忘れ勝ちになる……。」と。

『同志社百年』No. 3、清水安三「良心の手腕に活用……」は中江藤樹学派の「致良知」を語原とする」とありました。

しかしながら、先生の心の奥で願っていたものは、ウィリアム・ジェイムスのいわゆる、

「聖霊の光が降り注ぐためには、先ず良心が全身に充滿しなければならぬ」

すなわち、聖霊による洗礼を受けられる

人、言い換えれば、キリストによる霊的感情が、常に人格的エネルギーの中心となっている人、こうした人を同志社人と申すのでは、と思えます。二十八年目、同志社を去るに及んで、新島先生の言動は、真の聖書の理解へ、逆に聖書の体得は新島先生への理解へとの考えに思い及びました。堀貞一氏の言、「一度同志社に入ったものは、新島先生よりいただいたものをいただき、それを社会に向かって高揚しなければならぬ。」

私も同志社人になれますよう、ささやかな奉仕を、同志社に対して出来得なかつたことを社会に向かってさせていただければと念願いたしております。

(女子中・高教諭・司書)

